

## ぱちんこ依存問題

# ギャンブリング問題の理解と対応を事例から学ぶ

## リカバリーサポート・ネットワークが援助職者・サポーター養成講座開催

「リカバリーサポート・ネットワーク」(医学博士・西村直之代表、略称RSN)は8月27日、神奈川県司法書士会館で「事例から学ぶギャンブリング問題への理解と対応」と題して「援助職者・サポーター養成講座」を開催した。今年6月、沖縄で開催した第1回養成講座に続き2回目の開催となり、今回はギャンブリング問題に関わる援助職者および医療、保健、福祉、司法関係者ら幅広い職種からの参加があった。

RSNは、ぱちんこ・パチスロ遊技に関する依存および依存関連問題解決の支援を行うことを目的に、全日遊連の支援を受けて06年に設立された依存問題相談機関。

講座では、ギャンブリング問題からの回復者による本人の体験談、ギャンブリング問題からの回復者家族からの体験談も報告された。

RSN・西村代表が「ギャンブリング問題の基礎知識」「ギャンブリング問題の位置付けと評価」「ギャンブリング問題の援助のあり方」について講演したほか、司法書士の稲村



RSNの養成講座

厚氏が「多重債務への介入と対応」について、NPO法人ワンデーポート施設長の中村努氏が「当事者にとって回復とはどのようなことか」をテーマに講演した。また、参加者をグルーピングして、具体的事例をもとにディスカッションも行われた。

最初に西村氏は、ギャンブリング問題の基礎知識の中で、「ギャンブル依存症という言葉は、医学用語としては存在しない」としながら、アメリカ精神医学会の精神疾患の診断・統計マニュアルの中に、「衝動制御の障害」の分類があり、この中に「病的賭博」(パソロジカル・ギャンブリング)があることを指摘した。RSNでは、ギャンブル依存症という表現は使っていない。ギャンブリングとは、「合法であれ違法であれ、金額の多い少ないにかかわらず、偶然による不確定な結果に、自らの価値あるものを失う危険を冒し、時間・お金・信頼・将来などを賭ける行為」としている。

西村氏は、問題解決志向アプローチとして、「悪循環を止める回復支援を行うこと」を示し、①安易な医療化は“病气”への逃避を起こしやすい、②アディクションモデルだけでは無理であること、③安易な債務整理は、問題の深刻化(自殺リスクの増大含む)を起こしやすい、④反省や約束は、回復支援には効果はない



左から西村、稲村、中村の各氏

ことなどを指摘し、医療、福祉、当事者活動、司法など多角的な視点によるマネジメントの必要性を示した。

また、多重債務問題に取り組んでいる稲村氏は、とかく常軌を逸した「依存」には、借金問題がついてまわるとし、ギャンブリングは他のアルコール依存などと違って症状が出ずに、借金問題として表面化する傾向を示した。債務問題への介入にあたっては、アセスメントの段階ではなく、予後段階において債務整理をすることが理想としている。多重債務相談窓口の拡充により、速やかな債務整理が進められているが、これは間違った介入になりがちだとしている。病的ギャンブラーは、自分の行為に対する強い罪悪感があるため、正直な話をするのが困難であることを意識する必要性を強調した。

ワンデーポートの中村氏は、当事者の回復に必要な支援に向け、周囲の人(援助者、家族)が持ってほしい共通意識として、病的ギャンブラー本人から助けを求めることは少ないとしている。また、ワンデーポートにくる人は、パチンコ依存の人が多いという。